

http://www.minamih.net/



12・10・6(土)  
南NEWS NO39

### 試合が続きます。

赤・白のユニフォーム、水筒や帽子は勿論、GAMBAノートも3年生以上は必ず持たせてください。前の日に、試合に向けて自分のめあて・チームのめあてを考えて記入させてください。5・6年生でそれがしっかりできている子がいます。みんながそのようなしてくれることを願っています。自分達がめざすサッカーを自分達で創るためにGAMBAノートにめあてを書いて、成果・課題を確認し、次に生かすことで、どの子も成長してほしいのです。

### 残念な事！！

9月30日に行われた“三多摩は一つなり交流事業”サッカー交流戦で5年生は優勝、6年生は3位とGAMBAってくれたのですが、南の子の一部が大会関係者の指示に従わずに暴言を吐いたり、係の人にボールをぶつけても謝らない、挨拶をしても知らんぷりだったりということがあったそうです。朝、みんなを集めて「係の方や他チームの監督・コーチ、選手にも仲間としてしっかり挨拶をしようね」と話をしていたのですが、本当に残念です！！ 矢上

### 三多摩は一つなり交流事業サッカー交流戦<5年生の部>

5年の部、優勝おめでとう！！3勝1敗の得失点差で見事な優勝でした。

- ①南八王子 vs 西多摩 SSS 8-0 得点者：山本君(3) 五島君(2) 福岡君、斉藤君、永末君
- ②南八王子 vs バリオーレ日の出 FC 1-0 得点者：斉藤君
- ③南八王子 vs みなみ野 SC 0-1
- ④南八王子 vs 日ノ出仲良し FC 2-0 得点者：山本君、井上さん

○めあて

- ・サイド攻撃、わたり廊下を使う・守備つるべの動き・コーチング
- ・第一DFの質



○成果 第2試合のバリオーレ日の出 FC 戦では、守備力を発揮したすばらしい試合でした。強豪バリオーレ戦では守備時間が多くなることを予測して、前日練習した「第一DFの質」をめあてに試合に入りました。試合開始から守備意識は高く、素早いアプローチ、相手との距離感、前を向かせない接触プレーで相手をフリーにさせませんでした。何よりも、“しつこく” “粘り強い” 守備が目立ちました。ワンチャンスを活かした1点差を、高い守備の意識で守り抜いたベストゲームでした。4試合を通じて、守備力は向上しています。

○課題 守備時のつるべの動きがまだ十分に徹底できていません。特に両サイドバックのカバーの意識を高めたすばやいポジション修正が必要です。攻撃では、ボールを受けてからの判断、周りの受け手側のサポートの質に課題を残しました。試合中、ボールを持つ時間が長く、すぐ相手に囲まれてしまう場面が多いです。ボールを受ける前に周りを観ておく(攻撃オフの時の良い準備)、サポートの質(角度、タイミング、距離)を上げてパスコースをつくってあげることが大切です。

守備の安定から粘り強い試合運びができるようになっていきます。サイドを中心としたスペースを使った攻撃が出来れば、もっと得点力も上がります。そのためにも一人一人のレベルを上げて GAMBA ろう。 by 中野コーチ



開会式後の記念撮影 6年生の部

2年目になる大会。昨年の南の6年生加藤君の見事な選手宣誓が思い出されます。今年の5年生は、押し気味の試合で敗れるという展開もありましたが、日頃の成果を十分に発揮しての優勝です。ドリブルの力でサイド突破、中央突破と自在でした。



6年生 阿部君が優秀選手賞を獲得



5年生 斎藤君が優秀選手賞獲得



6年生 3位の表彰



5年生 優勝の表彰

### 秋季カップ戦 2年生 梶田グラウンド 9月17日(月祝)

○めあて いろいろな技を使おう 取られたら取り返そう

○南八王子0-0陶鎔元八 前半0-0

前半は三宅君のハーフウエーラインからのドリブルで突破したが相手に追いつかれ取られシュートできず残念！そのあと相手に突破されるも山本君が何度も止めました。

後半は南のペースで三宅君のシュートや八木君のドリブルからのシュートが入りませんでした。押し寄せのなか終わりにまじかに前川君のコーナーキックから転がってきたボールをゴール前にいた中田君(左利き)が、人がいて左で蹴れなくて右足でシュートしましたが GK に取られてしまい残念でした。

次はもっともっというろいろな技やターンを使ってGAMBA！！

by 三浦コーチ

ことばによる指導の大切さ  
……自信を得ることばと、自信を失うことば p16～19

静岡県教育文化研究所 大野木龍太郎

○ほめてから考えさせる

最近よく言われる「ほめて育てる」ことばかけですが、単にできたことだけをほめるのではなく、できないことへのチャレンジをほめる、過去から見てのびた部分をほめる（自己内評価）、他者への貢献（アシスト）という面からほめるなど、ほめる場面はたくさん転がっています。しかし、ほめられることを通して育ててこなかった親にとっては、叱られることが指導だと考えてしまいがちです。それは、できない部分をあぶり出し、その欠点を指摘し、それを克服させることこそ最重要だと考えています。「今の自分に満足するな」「上にはい上がる」「人より少しでも多く練習しろ」など、相対評価と練習の量に還元する傾向が、今も根強くあります。

子どもとスポーツの関わりは、内的要求に支えられ、「好きだから」という感情をベースにしていきたいものです。でも結果を優先すると（というか、それを求めているのは指導者であったり親であったりするんですが）、失敗を恐れ、のびのびとプレーする機会を失いがちになります。子どもはその時々プレーそのものを楽しめるようにしてあげたいものです。

そのためにかけてほしいことばは、「惜しかったね」「結果はパーフェクトではなかったけれど、いいチャレンジだったね」、そうすると子どもはまちがいなくニコニコします。笑顔を浮かべているのは「またやってみよう」と前向きになっている証拠です。自分がやったことが認められたことに対して、喜びを覚えているわけです。子どもが「次はどうしたらいいかな」と考え始めるエネルギーに変わっていきます。

特に小学校低学年の頃は、親や指導者から自分がやったことをほめられると嬉しいのです。試合でゴールを決めたとか、テストで100点取ったという結果ではなく、そのプロセスをほめる習慣をつけたいですね。そのプロセスとは、「難しいことなのに、すごく楽しそうにチャレンジしている」と見られるようになることです。

それなのに大人はつい否定してしまいます。そうなってしまうのは、欠点ばかりに目がいつているからです。悪いところを見つけて修正することが指導だと思いこんでいるからではないでしょうか。

たとえば「この子は足が遅いから、ゴールキーパーにしよう」という消去法的発想です。これは欧州の教育観との差を大きく感じる場所です。長所を生かすために、どうしたらいいかヒントを与え、子ども自身に考えさせる経験を積み重ねていけば、子どもは知らない間に自立していきます。そのバックには、「自分のやろうとしていることを認めてくれている」という自己肯定感を獲得していくのです。